

紀南病院 研修医通信 第49号

2014年8月号 平成26年8月29日発行

東京大学医学部附属病院研修医・内科

大矢真里子

「地域の人の暖かさに触れる」

まずは一ヶ月間、お世話になった皆様、ありがとうございます。

私の出身大学は東北大学で、宮城県仙台市にあります。東北六県の中核都市ではありますが、広瀬川や青葉山など自然に囲まれ、一歩外に出れば松島や蔵王など風光明媚な景色が広がり、またそこに住む人たちは暖かく、充実した学生生活でした。

今回地域医療研修でここ三重県を選んだのも、都会を抜け出してまた海や山など豊かな自然に囲まれた地域に行ってみたい。それもできたなら東北地方以外の地に行ってみたいという思いがあったからでした。

阿田和についたその日、まずその海の近さに驚きました。またこれから始まる地域医療研修がどうなっていくのだろうと少し不安を覚えました。

研修が始まると病院の方々には皆さん暖かく、なんとなく学生時代に実習にいった病院の雰囲気似ているなと思いました。新しい環境に慣れるのに必死で、なかなか役立つ所まで行き着くことができませんでしたが、病棟業務は大学ではなかなか診ることのできないcommon diseaseに沢山触れることができましたし、救急外来では勉強不足を痛感し、勉強のモチベーションになりました。ほとんど触ったことのない内視鏡も何度かやらせて頂きましたし、外科のオペにも入れて頂きました。診療所や消防署、保健所の研修のために病院を不在であった日も多かったにも関わらず、沢山のことを学ばせて頂きました。

院外の研修では熊野市消防署、紀和・尾呂志診療所、小森地区でのミニタウンミーティング、神島、保健所に行きました。

診療所やタウンミーティングへ向かう山道的美しさに感動し、また学生時代にさんざん走った東北の山道を思い出し、懐かしい気持ちになりました。バスの運転手さんがとても楽しい方で、美しい景色の説明を沢山してくださいました。

各診療所で驚いたのは、患者さんたちがとても元気なこと！神島診療所にきていた、「毎日300段の階段を登っている」おばあちゃんが90歳であったことには本当に驚きました。

そしてこの地域に行っても話すことの大好きな、暖かい地域の人々と沢山触れ合うことができました。なかでも、一番記憶に残ったのは小森地区でのミニタウンミーティングです。楽しく会が終了したそのあと、あの事件が起こりました。電波がつかないにも関わらず、携帯電話をスポンのポケットに入れていた私は、公民館のトイレ(ぼっとな!!!)に落ちてしまったのです。そして困っていたら、帰りかけていた小森の人々やミニタウンミーティングに来ていなかった人たちが次々と手助けに来てくれたのです。色々な道具、手袋、懐中電灯、熊手を貸してくださり、さらには「俺がやるよ!」と男性の方が言ってくれたり、ついに私の携帯電話は救出されました。記憶に残ったのは落ちてショックを受けたからではありません。あまりにも自然に、小森地区の人々が助けてくれたからです。

週末や休みは、紀南地区の様々なところにも出かけました。熊野古道や潮岬、那智・速玉大社、ずっと行きたかった伊勢神宮にもお参りにいくことができました。熊野大花火大会は本当にものすごい迫力で、このためだけのためでも三重にきてよかったと思える美しさでした。帰りに事務長さんのお宅で一杯頂いたのも本当に楽しい時間でした。

一ヶ月という短い期間ではありましたが、紀南病院の皆様、紀和診療所、尾呂志診療所の皆様、熊野消防署、保健所、神島の皆様、そして小森地区にお住まいの皆様、皆様のおかげで無事研修を終えることができました。厚く御礼申し上げます。ここでの経験を今後に生かし、少しでも人の役に立てる医師になりたいと思います。機会があれば是非また三重に遊びに来たいと思います。本当にありがとうございました。



三重大学医学部附属病院 研修医・内科

塚本弘毅

「地域の人達の笑顔と人間愛」

私は今回の地域医療研修を無理を言って突然に紀南病院にお願いする事になりました。受け入れにあたって奥野先生と面談させていただいた際、先生は「何科になりたいかも大事だけど、人としてどこで暮らしたいかも大事だよ」と仰られて、その言葉に大ききでなく衝撃を受けました。医学部に入って以降「何科になりたいか?」は何度も問われましたが、一介の市井に生きる人間として「どこで暮らしたいのか?」と問われたことはありません。私はこれまで地に足が着かない浮ついた生き方をしてきたので各地を転々としてきましたが、その都度、ただ糊口をしのご為のみに受け入れてくれる学校、会社の近郊に住んできました。自ら「この場所に住みたい」と望んで住んだことは一度もないことに初めて気づきました。奥野先生との面談は30分にも満たなかったと思います。しかし、私にとって新たな視点を与えていただいた貴重な機会となりました。

今回の研修では我が儘を聞いていただき、診療所を回らせていただきました。僅かながらでも「そこに暮らす人々」を見、その人たちが暮らす環境を肌で感じることもできたと思っています。特に紀和診療所で1時間以上お話を聞かせていただいたYさんの「Little Britain」のお話には、紀和町で暮らす人々の人間愛を強く感じ、大いに心を動かされました。紀和の皆さんはもちろん御存知だと思いますが、敢えてこの時のお話を聞いた時の感動を綴らせて頂きます。

「誰もが同じ人間である」ことに現在の日本に暮らしている限り疑問を持つことはまずありません。しかし、戦争の気配が高まると、戦争指導者達はこれを否定し、敵と味方に分類し、自国民に対してあらゆる手段を使って「敵」を人間ではないと思込ませようとしします。「鬼畜米英」といったスローガンはあまりにも有名です。またそう信じこませなくては戦争を遂行することは困難です。戦中、日本国内には多くの捕虜収容所がありました。しかし、その多くは存在すら確認するのが困難なほど「なかったこと」にされています。勿論、戦後復興の最中に戦争の爪あとを残すなど考えられない事だったのかもしれませんが、記念碑すら無いことが殆どです。ところが、紀和町の人々は世間で鬼畜米英を叫ぶ中、捕虜として苦役された果てに祖国の土を踏むことなく亡くなった英国人兵士と同じ人間としての悲しみを感じ、その遺骨を拾い墓を作りました。更にその後、大理石に亡くなった兵士の名を刻み、メモリアルガーデンへと改修、指定文化財に指定し、現在に至るまで弔い続けています。一次的な感傷でこのようなことが行われることはあり得るかも知れませんが、戦後70年になるうとする現在に至っても、いまだ弔い続ける人々の心の大きさ、情愛の深さは計り知れません。人間として紀和町の皆さんを心より尊敬すると同時に、医師を目指すものとして自分もまたかく有りたいたいと心に刻みました。

短い間でしたが、地域の方々とお話し、笑顔を見ることが出来ました。様々な面で便宜を図っていただき充実した研修をさせていただきました。本当にありがとうございました。

